

# 日本語と 出会う 楽しみ

作家

楊逸

言葉と向き合う——まさに日本で半生を過ごした私のことを語っているように思える。と言っても、私は生来怠け者で勉強嫌いな人間なのである。真面目に日本語の勉強に取り組むはずなどもなく、むしろ日本で生活しなければという環境に放り出されたおかげで、ある種無理やり、「言葉と向き合わざるを得ない」ようになったのだった。

初めて日本語学校で勉強した日本語は、今もはっきりと記憶に残っている。——私は日本語を勉強します、であった。「勉強」の二文字を目にした途端、落胆したからだ。同じ意味の中国語は、「我学習日語」となる。つまり「勉強する」は、中国語で学習という語にあたる。むしろ中国語にも「勉強」という単語があるが、それは日本語の「無理する」という意味になる言葉だ。

その瞬間、「己の勉強嫌いという「持病」のワケを悟った。——勉強するとはつまり無理をするである、と。それからというもので、できるだけ無理をしないという怠け者根性で、勉強に打ち込めずに、日本語学校を出て、大学も卒業した。幸い

脚——現代漢語では、足首の下、靴（ブーツではない普通のもの）を履く部分を指す。私は小説の中で、その部分を表そうとして、思い込みで、あえて「脚」という漢字を使いたいと主張した。「それなら『足』になりますね」と編集者が言う。「私が言いたいのはこの部分ですよ」。焦るあまり、私は靴を脱いで、足を見せた。「そう、その部分は足で、日本語の『脚』は骨盤から足首までの部分になります」。

そんなやり取りは三十分も続いただろうか、残念なことに、日本の辞書には、「脚」と「足」は、アシと括つていう身体部分を、具体的にどう使い分けるかを明示してないことが多い。権威的な根拠が見当たらないまま、日本人の日本語なのだから、私は妥協した。その後編集者が正しいと判明し、以来女性ファッション誌に躍る「美脚」などの文字を見ると、ついつい逃げたい気持ちになってしまう。

言葉の面白さは、真剣に向き合うときにやっと伝わってくるものだ。いつか新聞を読んでいたら、あるおじいさんが、

——企業努力で利益を上げる。  
——この神社は金運アップのご利益があるとして、事業成功の祈願に多くの人が参拝に訪れています。

右の二つの文、どちらも「利益」という単語が入っているが、読み方が異なる。前者は「リエキ」と読み、辞書では「事業などをして得るもうけ、利潤」と解釈する。

後者は「リヤク」と発音して、「神仏が人間に与えるお恵み、幸運。ご利益。靈験。」あるいは「人や物によって受ける恵み」という表現で解釈されている。

企業努力して求めているのは、あからさまに言えば、つまりお金という形で確認できるようなものだけである。この世の物事が、一旦お金にかかると、どうしても俗っぽくて不純のイメージをもってしまふ。それゆえ寺や神社に、神さまにお願いしに行くときは、利益（リエキ）を——たとえ「金運アップ」をはかりたいという金絡みの目的であっても——使ってはならない。

同じ漢字で書いて、読み方に気を利かせる。——リヤクと読ませたうえ、前に尊敬を表す「ご」をつける。神さまに細心の敬意を払い、リヤク度を高めたいしたたかささえ感じられる。これほど柔軟性をもった言語は、ほかにあるのだろうか。「利益」の一語は、日本文化のそんな繊細な一面も覗かせてくれる。

同じ漢字でも、日本語になると、発音を幾つものもってしまうし、それによって、意味や使い方も変わり、表情が俄然豊かになって魅力が増す。中でも最も感じるのは、「利益」という言葉だ。

楊逸

1964年 中国黒竜江省ハルビン生まれ。1987年に留学生として来日し、お茶の水女子大学教育学部を卒業。在日中国人向けの新聞社勤務などを経て、中国語教師となる。2007年「ワンちゃん」（文藝春秋）で文藝界新人賞を受賞。08年に『時が滲む朝』（文藝春秋）で芥川賞を受賞し、日本語以外の言語を母語とする作家として史上初の受賞となり、話題となった。『すきやき』（新潮社）、『獅子頭』（朝日新聞出版）など著書多数。

